

今日からすべきことを考えてみた



武蔵野美術大学 三澤一実



今日も旅するムサビ（旅ムサ）を千葉県でやってきた。旅するムサビはコロナ禍の期間、対面実施を中止しオンラインでの対話鑑賞を試みていたのだが、昨年からはポチポチと対面実施を復活させた。やはり、児童・生徒には実物を見せたいし、そして作者と語り合いたい。

旅するムサビは学生が自ら制作した作品を携え学校などを訪問し、そこで子どもたちと対話しながら作品を鑑賞する取り組みだ。今年で16年目に突入する。よくもまあ続いたものだと思います。自分自身がこの活動になぜここまで惹かれているのだろうか考えてみた。

先日は都内の小学校で対話鑑賞を展開してきた。3日間連続で2時間続きの授業を5年6年の計6クラスで展開してきた。1時間は学生作品の鑑賞。もう1時間は児童の作品の鑑賞。ここでも新たな発見があった。

昨年の秋には奄美大島の小さな小中学校で実施してきた。児童生徒の総数は小中合わせて30人弱。学区内の子どもは一家族の3人のみだ。それ以外は学区外から少人数指導を希望してバスで通っている。大きな学校になじめない子どももいるし不登校だった子もいる。だからみんなとても優しい子どもたちで、一つの家族のようだ。その学校も3人が卒業すると廃校になるらしい。

これから埼玉の中学校を巡る旅ムサと、新たに横浜で行う旅ムサ、他にもいくつかの黒板ジャックを控えている。

旅するムサビというように、旅が魅力の一つである。まだ見たことの無い世界を覗きに行くようなワクワク感の旅もあるし、また、同じ学校を訪問する、どこか親戚を訪ねるような旅もある。どちらの旅もそこには必ず発見と気づき、そしてそれを与えてくれる魅力的な人と土地が待っている。そう感じながら実施件数は15年で500件を越えてきた。

教育現場を訪れる旅は旅ムサだけでは無い。校内研修に呼ばれたり、時には「授業見せて」と押しかけたりする。学校訪問は美術教育研究のフィールドワークな



2023/10/27 奄美での対話鑑賞の様子



美術館になっている元小学校

のである。教育実習の訪問もそれに含まれる。

だいたい年間20校は見て回るだろう。すると、日本の美術教育の現状が見えてくる。玄関を入るとこの学校は優しい学校だなとか、ちょっと厳しい窮屈な学校だなとか。そもそも窮屈な学校にはあまり呼ばれないから、窮屈とすることは稀である。優しくそうな学校でも各教室を覗くと担任の人となり、そしてクラスの様子が見えてくる。壁に貼られた掲示物や子どもたちの学習の成果物が小声で話しかけてくるのである。

最近、訪問時に気になるのは時代に取り残されている教師の存在だ。ここ数年朝鑑賞の校内研修に呼ばれることが多く全教科の先生と話す機会が多い。学校の先生といえども数十人集まればそれはまるで一つの学級のような。学級には様々な子どもたちがいるように教員学級も多様だ。中には、何者が来たんだ、と斜めに構え、あからさまに態度に出している方もいる。担任校長は大変だなあと思いながら話を始める。

図工・美術の教員でいえばガチガチの技術指導でそれを授業の信条にしている人もいる。本人は時代に取り残されている意識などさらさら無いのだろう。むしろ、自信持って指導している。子どもたちの作品からは個性が消え教師の顔しか見えてこない。昭和の指導から全く進化していないのである。そこには学べない教師がいる。

時代はものすごいスピードで変化している。この間、コロナ感染症のパンデミックが時代の変化に拍車をかけた。

そして生成AIが衝撃を持って登場し美術教育の先行きを不安視する声も出ている。終わりが見えない争いによる世界の不安定は続く。そして厳しさを増す気候変動。経済格差。止まることを知らない人間の欲望と自然とのせめぎ合いの中で、マクロの視点に立ち未来に希望を見



2024/1/23 茨城県教育研修センター「STEAM 研修」

いだそうとするとき、私たち美術教育に携わる者は一体何ができるのだろうか。私はそろそろ美術教育の再点検の時期だと思っている。



研修で鑑賞のファシリテーション演習(小中高全教科対象)

現行の学習指導要領はコンテンツベース（学習内容）からコンピテンシーベース（資質・能力）の学びへ舵を切った。まさに時代の

要請だ。コンピテンシーベースの学びは平成 20 年度版の学習指導要領から議論されている。しその源流はさらに遡る。いわゆる「生きる力」であり、本来ゆとりと教育で見いだしたかった学力観でもある。

現実には平成 29 年の学習指導要領でコンピテンシーベースに変えていかなくはならない状況まで切羽詰まっていたのだ。「もう後が無いですよ、皆さん」と時代が言っている。各教育行政機関も研修に力を入れている。

さて、我々大学教員がどこまでこのことを意識しているだろうか。保育士・教員養成という仕事に携わり、未来の指導者を育成している私たちが、ここまでの危機意識を持ち合わせているだろうか。何年後か、目の前の学生が関わるだろう子どもたちの姿を私たちは思い浮かべ、その子どもたちの未来まで想像できているだろうか。未だに、大人にとって、保護者にとって、魅力的に映る子供らしいと思える“大人目線で捉えた指導”をよしとする教えを学生にしていけないだろうか。無邪気に大人の指示に従って動く子どもを「しっかり躰られていて良い子どもたちだ」と見ていないだろうか。大人が敷いたレールを走らせて、子どもがここまでできると見世物にしていけないだろうか。

本日訪れた中学校も昭和の香りがした。ただ、その中学校は美術の専任がおらず、理科と体育と教務主任が美術を教えている。「どうやって作品を作らせてよいか、その指導が分からず手探り状態なんです」と言っていた。

「いやいや、そうじゃ無いです。美術は作品づくりが目的では無くて、制作を通して、美術の『知識・技能』『思考力・判断力・表現力等』『学びに向かう力・人間性』を育てるんです」と、私は面と向かって言えなかった。

相手が美術の先生ならば「先生、もうその時代ではありませんよ。資質・能力を育てる時代ですよ」って、丁寧に語るだろう。

美術の知識についての理解もあやふやだ。美術の知識は身体と共にある知識のことを言っている。

幼児から大人まで、いや、死ぬまで、経験を通した身体的な体験から生まれる感情が、その場の造形的な色彩や形、材料の質感や光、それらが組み合わさって感じる奥行きや動き、余白や空間などの造形的な視点とむすびつき、それら造形の特徴に言葉を与えていく。そのことを理解し、習得することで概念化された知識となっていくのである。その概念化は特定の発達段階を切り取って学習するものではなく、生まれてから死ぬまで不断の生の中で成長に応じた学び方をして常に知識が更新されていくものだ。特に幼児教育での学びがその基礎をつくっていく。



子どもが絵の具を触ったときのぬるっとした感じや、鮮やかな色への驚き、また色が混ざったときの模様や色の変化。石ころの形や並べたときのリズムや模様。それらに興味を持って眺めて、また手を出し、つくりかえていく。手が脳の出先器官として外界を探ろうとしているその姿。それらはAIには到底できない人間の学びとなりその質感が心に蓄積していく。

『知識は身体でできている』,レベッカ・フィンチャー-キーファー (Rebecca Fincher-Kiefer),新曜社,2021.には、「身体化された知識は、概念知識の表象が身体に依存することを意味する」と認知心理学的見地から知識について書かれている。そして、「認知は特定の個人の形質と生理機能に合わせて調整された知覚・運動処理から生じる。このような考え方からすれば、自分自身の身体や感情

に特有の特徴や属性が、感覚情報を獲得し使用する能力を決定づけ、感覚情報に意味を与える -知識に変える- のである。」と述べ、知が個体に紐付けられているという固有性に言及している。

『情報を生み出す触覚の知性』,渡邊淳司,化学同人,2014.では、言葉である言語を記号として捉え、「言語記号の意味を『自分事』として理解するためには、言語記号自体を学習するとともに、言語記号の指し示すものを自身の体験に接地すること（「記号接地」）が必要となります。」と述べ、さらに「記号接地問題は記号あふれる現代に生きる私たちの情報認識にとっても大きな問題となります。普段、私たちが使用している記号は、全て自身の感覚によって接地されたものだといえるでしょうか。むしろ、接地しない状態で使用している記号も多いのではないのでしょうか。」と、本質的な理解を伴う言葉のリアリティ、即ち意味の獲得を「触知性」という身体との接続で問うている。

幼児期の体験は人間の一生に大きく関わってくる。A Iに対抗するには体験から生まれるクオリアが必要だと個人的には考えている。クオリアとは意識の内容であり質であり意識そのものであり、広辞苑ではクオリアを「感覚的体験に伴う独特で鮮明な質感」と説明している。

子どもが繰り返し、全身を使って飽きずに対象に関わっている姿は、まさに知識を蓄積している状態である。クオリアを体に刻み込んでいる学びである。そう私は考えている。その蓄積が義務教育で整理され、言葉と紐付けられ、さらに高校、大学と専門化され細分化され知識は精緻になっていく。あらためて〈子どもは単なる小さな大人ではなく、質的に異なる存在であり、それぞれの発達過程は代替できない固有の意義を持つ〉という近代的な子供観を再確認したい。

つまり、私たちは園や学校という制度的に抽出された子どもの一部の発達段階だけを見つめるのではなく、代替できない固有の意義を見いだすために、幼、小、中、高、大、そして社会に至る全ての成長過程と教育とを把握する必要がある。異なる校種での学びを十分に知り、次の校種に学びのバトンを渡す仕事をしなくてはならない。

美術は一世代かぎりの能力である。美術の知識も生まれてから死ぬまでの一世代限りだ。大人が先回りして教え込み、彼らの驚きや、発見、気づきを奪ってし

まうことは未来を創る子どもたちから学びを奪っていることになる。たとえば、見栄えの良い演技をさせるのも大人の都合で、これまた子どもの学びを奪う事になる。そのような子どもたちは常に大人の顔色をうかがう子どもに育つだろう。

これからの時代、A Iに対抗するには身体感覚を鍛えることが重要だ。

約 30 年前に『共通感覚論』を書いた中村雄二郎は『臨床の知』という本も書いている。そこには 17 世紀以降ガリレオ・ガリレイらによって主観を排除した近代科学が確立し、その恩恵により今日の科学の発展を築き上げたとしながら、その科学が持つ論理的明快さ、普遍性、客観性に対して、排除されてきた人間らしさの固有性（個性）、物事の本義性（多様性）、そして身体性などが社会を形づくる上で重要であると唱えている。近年にわかに S T E A M 教育などといわれ始めたのは中村が指摘する近代科学の行き詰まりから生まれてきているのでは無いだろうか。

私たちは再度臨床に戻って子どもを観察する必要があるだろう。数多くの実践を眺めてこれからの美術教育者を育てていきたい。そして今の教育を創造的に捉え直し、批判的視点を持って美術教育を再構築していこう。そしてその根拠を臨床に求め、子どもの本来の姿を再確認し、同時に現在の社会を俯瞰し、教育の成果で生まれる未来を予想し、その上で保育士・教員を育てていく必要がある。もう一度自分たちの足下を見よう。

美術教育にとって「型」は必要ないものだと考えている。「型」は共通性があり、だれにでも分かりやすく他者に伝えられるシステム（マニュアル）だ。機械のように何も考えなくても、型にはめていけば作品ができてしまう。「酒井式描画法」などがよい例だ。型にはめていけば大人をも“子供らしい作品だ”と、いとも簡単に欺く作品を描くことができる。果たしてそのことが子どもたちにとって人生を生きる上でどのような力として発揮されるであろうか。人間は決して型にはめられるのもでは無い。特に造形美術に関わる教育はそのことに危機感を感じなければならない。

A I に対しても同様だ。見栄えが良いものは知らぬ間に本質的をすり替えて存

在していく。気をつけなければ AI が作りだしたものが真実として存在していく世の中になるだろう。美術教育はそれを防ぐ批評力を身に付ける役割も果たしている。その批評を成立させる基盤は 0 歳から始まる身体から生み出された“生きた知”なのである。

別紙 1

各教科等の特質に応じた見方・考え方のイメージ

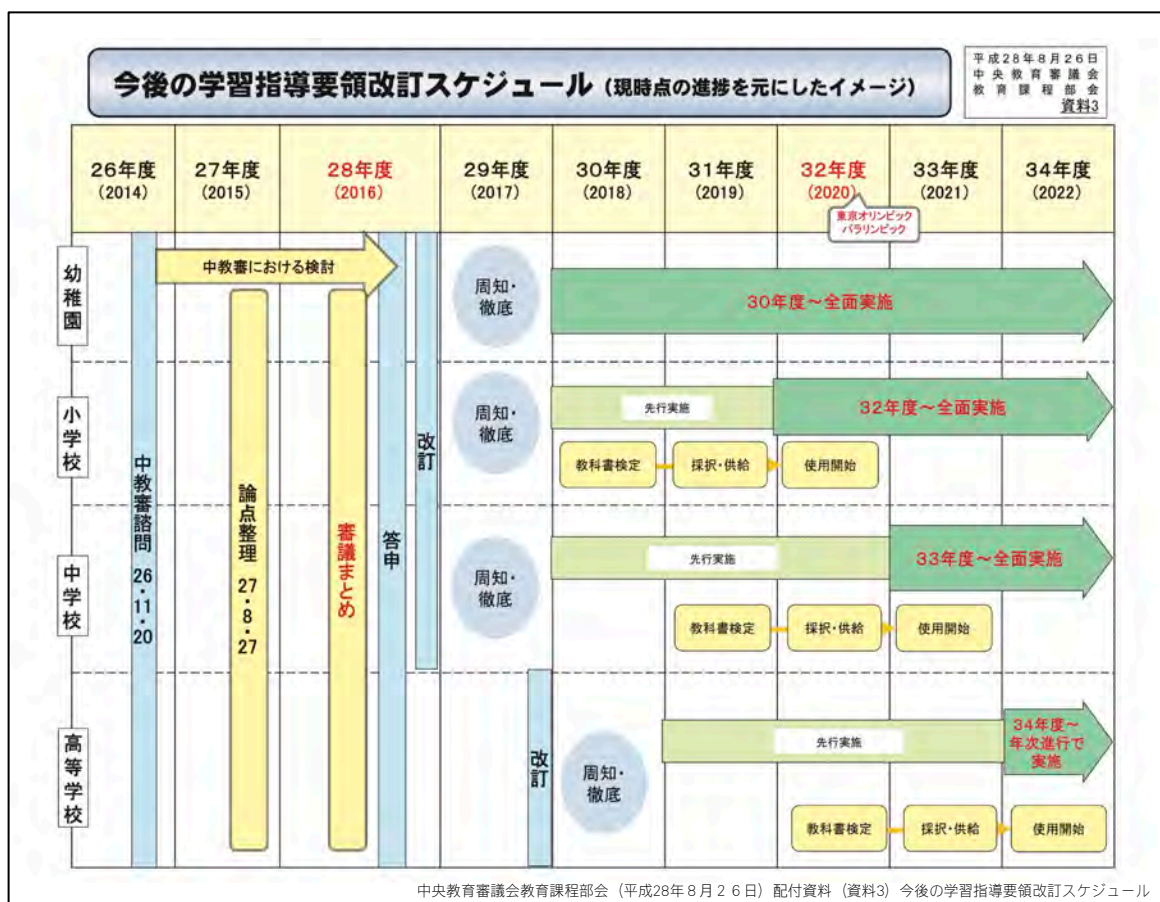
言葉による見方・考え方	自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。
社会的事象の地理的な見方・考え方	社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること。
社会的事象の歴史的な見方・考え方	社会的事象を、時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり、事象同士を因果関係などで関連付けたりすること。
現代社会の見方・考え方	社会的事象を、政治、法、経済などに関わる多様な視点（概念や理論など）に着目して捉え、よりよい社会の構築に向けて、課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付けること。
数学的な見方・考え方	事象を、数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統一的・発展的に考えること。
理科の見方・考え方	自然の事物・現象を、質的・量的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること。
音楽的な見方・考え方	音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること。
造形的な見方・考え方	感性や想像力を働かせ、対象や事象を、造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすこと。
体育の見方・考え方	運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること。
保健の見方・考え方	個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること。
技術の見方・考え方	生活や社会における事象を、技術との関わりの視点で捉え、社会からの要求、安全性、環境負荷や経済性等に着目して技術を最適化すること。
生活の営みに係る見方・考え方	家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること。
外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方	外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること。
道徳科における見方・考え方	様々な事象を道徳的諸価値をもとに自己との関わりで広い視野から多面的・多角的に捉え、自己の人間としての生き方について考えること。
探究的な見方・考え方	各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会や実生活の文脈や自己の生き方と関連付けて問い続けること。
集団や社会の形成者としての見方・考え方	各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、集団や社会における問題を捉え、よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会への参画及び自己の実現と関連付けること。

※中学校のイメージ。

中教審答申では今回の学習指導要領の改訂に伴い、共通で求める資質能力を補完するために、「各教科等の特質に応じた見方考え方のイメージ」を提示した。その造形美術教育に該当する「造形的な見方・考え方のイメージ」では「対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくり出すこと」と言っている。先の表を見てもらえれば分かるのだが全ての教科の中で唯一、図工・美術が「つくり出すこと」と言っている。

さて、次期教育要領、学習指導要領の話をしてしよう。

今までの10年ごとに行われる学習指導要領の改定スケジュール感でいくと、早ければ2025年、遅くても2026年には次期学習指導要領の改訂作業が始まるだろう。



前回の学習指導要領の改訂スケジュール

現在、美術教育に関わる8団体が新たな会議体を作り、次期改訂に向けて美術教育の提言を行おうと準備が始まった。全美協からも浅野卓司先生と手塚千尋先生が代表として参加している。

今後全美協での意見集約が始まるだろう。その前に、あらためて『幼稚園教育要領解説』『学習指導要領解説』を熟読して深い理解をしておきたい。

昨今、大学の受験人口が減ってくる中、大学が小・中学校のように保護者向けサービスとして保護者会など開くようになってきた。『幼稚園教育要領解説』『学習指導要領解説』は読んでいませんとは言えない時代になってきた。インターネットが生活に必須の情報源となった今、これまでのような呑気な文科省批判や旧態依然の授業実践では保護者に論破され訴えられるだろう。大金をかけて大学にそして我々に子どもの成長を預けているのだから。面倒な時代だが、今からでも遅くない。生きるために時代に向き合うしかない。

2022年に全美教の「造形 Well-Being ミーティング」をきっかけに生まれたBlogに教育要領/指導要領の目標とねらいが簡潔にまとめられている。以下に参考に掲載する。

<https://kodomonoe.exblog.jp/32877694/>

平成30年3月 保育所保育指針 厚生労働省 より

1歳以上3歳未満児の保育

表現 (感性と表現に関する領域「表現」)

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

ねらい

- 1 身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう。
- 2 感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする。
- 3 生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる。

平成30年3月 幼稚園教育要領 文部科学省 より

表現 (感性と表現に関する領域「表現」)

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

図画工作科

表現及び鑑賞の活動を通して、
造形的な見方・考え方を働かせ、
生活や社会 中の形や色などと
豊かに関わる資質・能力を
次のとおり育成することを目指す。

(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的にじっくり表したりすることができるようにする。

(2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。

(3) つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。

美術科

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、
造形的な見方・考え方を働かせ、
生活や社会 中の美術や美術文化と
豊かに関わる資質・能力を
次のとおり育成することを目指す。

(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。

(2) 造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の創きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。

(3) 美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。